

平成 23 年度

「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究（共同利用型）」
滞在報告書

課題名： ヴラジスラフ・ホダセヴィチとその周辺

滞在者： 三好俊介（電気通信大学等非常勤講師）

制度を利用して、2 回にわたり計 5 日間（平成 23 年 12 月 8～9 日、平成 24 年 2 月 7～9 日）、スラブ研究センターに滞在し、標記課題の研究を行った。基本的には全日程を閲覧室や書庫で過ごし、「センター」収蔵資料を中心に、各種資料の閲覧と複写に従事した。「センター」の所蔵資料の相当部分は北大付属図書館本館に移管されているが、この本館が、書庫入庫や貸出し業務も含めて、夜遅くまで開いているのは短期滞在者にとっては非常に有り難く、日程を有効に活用することができた。滞在にあたっては、様々な教官・職員の方々のお世話になった。厚く御礼申し上げたい。

今回の探索対象は 20 世紀初頭のロシアの詩人ホダセヴィチをめぐる、限られた範囲の資料だったにも関わらず、収蔵資料の分量は予想をかなり上回るものだった。私はロシアでの生活が長く、本件研究課題についても目ぼしい資料はロシア国内で集めてきたはずなのだが、それでも今回、思いがけない資料に巡り合っては嘆息を漏らすことが何度もあり、「センター」の収蔵資料の厚みを改めて思い知らされた。ホダセヴィチはロシア革命ののち数年で亡命して後半生の大半をパリで過ごしたので、ロシアで文献収集を行う場合は、亡命時代の資料がどうしても手薄となる。今回の「センター」滞在はこの穴をできる限り埋めるためのものであり、所期の目的には到達できたように思う。ホダセヴィチと直接関係するわけではないものの、当時の亡命ロシア文壇の雰囲気を探り知る興味深い文献も、いくつか見出すことができた。図書館本館の修繕工事の影響で、スラブ新聞資料コレクションが閲覧不可能だったことが唯一の心残りだが、将来の楽しみが一つ増えたと考えことにしたい。いずれ、別の機会に再訪しようと思う。

滞在中は、若手研究員の方々が詰めている大部屋の一角に机を与えられ、快適に作業を進めることができた。このような報告書に記すべきことなのかどうかは分からないが、周囲の環境に研究上の刺激を受けたことは、今回の滞在における予期せざる成果だったように思う。一心不乱に研究に邁進しておられる気鋭の方々を横目に、窓外に降る雪を眺めていると、自分がロシアで学んだ遠い日々が思い出され、久々に初心に戻ったような気分になった。今回の滞在の成果は、今後書かれるべきいくつかの文章に生かしてゆきたい。

制度利用の機会を与えて頂き、大変有益だった。改めて御礼申し上げたい。

（了）